

Osamu Sudo, Editor

Digital Economy and Social Design
Springer-Verlag, 2005

本書は、文部省科学研究費特定領域研究「ITの深化の基盤を拓く情報学研究」（代表：安西祐一郎教授）の成果の一部を、須藤修教授の編集によって一冊の英文の論文集にまとめたものである。

本書全体を貫く縦糸は、この研究テーマ及び本書の題名からも明らかなように、現在も進みつつあるIT技術の発展、インターネットの普及とそれに続くブロードバンドへの移行が社会へ与える影響への関心である。その上で、それぞれに違う角度からこの問題を扱っている各論文を単純に並べるのではなく、大きく3つのアプローチに分類し、読者の頭の整理がし易いように配列している。

すなわち、第一パートはIT化が社会全体に対する影響のマクロ及びミクロ経済的側面に焦点を当て、第二パートはビジネス上の競争の性質に与える影響に、第三パートでは政府や企業の構造に与える変化に注目するものとなっており、各パートにはそれぞれ3編の論文が含まれている。

通読して、第一に感ずることは、この分野の技術的側面の変化の余りの激しさである。確かに、IT関係の世界では、ドッグイヤーというのは常識である。それを考慮しても、昨年度出版されたばかりのこの本の中の論文で扱う題材の多くが、既に過去の話題に思えるのには驚かすにはいられない。この傾向は、特にビジネス面を扱う第二パートにおいて顕著であり、例えば、

第4章の組織通貨の後日談として、地域通貨は失敗という大方の評価、対して商業ベースの電子ポイント・システムの隆盛、SUICA、Edy等に見られる電子通貨の離陸、あるいは、第5章の移動体インターネットに続く動きとして欧州諸国での第三代携帯電話の急速な立ち上がり、第6章のネットのマーケティング価値に関わる新たな変化としてブログとSNSの発展など、その後の変遷を知っている者は、論文中の予言の検証という読みの誘惑に駆られずにはいられない。

第二に、それにもかかわらず、社会を構成する最も重要な要因は人間であり、人間が社会を認識する方法には大きな慣性が働いていることを認識させられる。すなわち、技術的な変化がいかに大きくとも短期的には表面的なものにとどまらざるを得ず、それがより深い基礎的な部分に達するにはいまま少しの時間が必要であることに気づかされるのである。例えば、第1章の知識ネットワークの発展、第9章の電子自治体の普及については、確かに多くの技術的变化はあるのであるが、基本的な問題意識という点では変わるところがない。

第三に（そして最後に）感じることは、今も進みつつあるこのIT化が如何に多方面に、かつ深く社会に影響を与えているかということである。IT化という共通項があるにもかかわらず、各論文のテーマは非常に多岐に及んでおり、配列の妙がなければいささか統一感に欠けた印象を与える可能性さえあった。にもかかわらず、これらの論文の分析対象が社会のIT化の影響の氷山の一角にさえ達しないことは明らかである。

以上のような感想を抱かせる本書は、経済学・

経営学的視点から社会に対するIT化の影響を考察する上での第一歩として格好の書といえるのではあるまいか。

岡崎 毅



岡崎 毅（おかざき つよし）

〔専攻領域〕 情報法・情報政策

〔著書・論文〕 『メディア判例百選』 103事件等

〔所属〕 内閣法制局（執筆時：東京大学大学院情報学環）

〔所属学会〕 情報通信学会